展 景

季 刊

No.109

Spring 2023

季刊　展景 109号

目次

フクシマ再訪〈俳句〉……新野祐子　4
早春の水〈短歌〉……布宮慈子　6
シクラメン〈短歌〉……市川茂子　8
弥生〈短歌〉……梅津純子　10
2023年早春〈短歌〉……大橋千佳子　12
残生〈短歌〉……小野澤繁雄　14
〈那須通信 54〉ハルが来るまで……加藤文子　16
〈薫風颯々 28〉小説ユーミン……神村ふじを　20
対詠　ごきげんいかが？　PART 85……小野澤／布宮／（河村）　22
前号作品短評A……　24
前号作品短評B……　27
エッセイ教室「清紫会」の作品より
はじめての事……市川茂子　30
無二の会短信……　32
編集後記……　36

今号のイメージ／タケノコ

フクシマ再訪

新野（にいの）祐子

有機農業者つどう安達が原に東風

この十二年つくりし輪こそひこばゆる

不耕起説くミミズ博士の自然体

耕人よガラスバッジをはずそうか

＊ガラスバッジ＝個人線量計

帰還困難区域よりノスリの巣立ちかな

雲雀揚がらぬ田んぼは除染の轍のみ

若緑津波の跡地彩れり

海市たしかに請戸小学校の二階より

よく太れソーラーシェアリングのぶどうの芽

山笑うあぶくま号の大汽笛

早春の水

布宮慈子（やすこ）

城跡の土手に見つけしフキノタウ春の証のやうに咲きたり

梅園と呼ぶほどはなき梅の木の咲き始めのよし白梅香る

思い切つて出てきて城址公園に梅を見てゐる飽きるまでを

数人がウインドブレーカーを着て歩くのみなり霞城（かじやう）公園

公園の博物館の裏手には陽だまりあれど野良猫をらず

野良猫に先に会つたは一年前か無事に冬を過ごしただらうか

三年の記憶とふものあやふやに疲れ果てたるマスクがひとつ

梅の香をわづか体に残しつつお濠を渡りこの世に帰る

目立たない鴨らは淵にじつとして石のごと見ゆ早春の水

冬の日にお濠の土手に飛んできし翡翠（かはせみ）の色おもひて歩く

シクラメン

市川茂子

見るかぎり雲一つなく冬の陽はわが生日の頭上を照らす

冬至よりひと日遅れて入るユズ湯常変りなく老いのたつきは

鈍色の空は静かに暮れてゆく新たなる年へ時刻みつつ

生垣の山茶花などが払われて住宅街は塀高くなる

古き家解体されて新築の立て看板を見つつ通りぬ

九十歳生きる覚悟と死する覚悟天に放ちて初日を仰ぐ

初春の陽ざし入りくる大鉢のシクラメンの生気わが部屋に満つ

家内に春の陽入りて友のくれし大鉢の赤きシクラメン映ゆ

十年に一度の寒波とう予報その夜は風をともないて冷ゆ

晴れ渡る空に蕾をかざしつつ辛夷一本崖ふちに立つ

弥生

梅津純子

いつに見し雲一つ無き青空か僥倖のごと弥生の空晴る

残雪の山山は照り雪国の灰色の季の去りゆくを見る

次の歌集編まむと既に幾年かフクシマ辺野古ウクライナ続く

フクシマに辺野古埋め立て、ウクライナただごとならぬことの続きぬ

思はざる病の続き年年に残さむ歌の積み重なりぬ

歌集にはただごと歌も必要とふ亡き師の言葉をりをり甦る

陽だまりの青と黄色の除雪機よウクライナの子らに春はいつ来る

二〇二二年三月十日

再びの春陽の中の除雪機よウクライナの子らに戦火は止まず

二〇二三年三月四日

コロナ禍に生れたる孫も一歳半初に会はむと駅に急ぎぬ

とことこと歩き始めた小さき人わが知らぬ世を生きゆく背よ

２０２３年早春

大橋千佳子

初めての一月開始の手帳繰る四月以降の白さまぶしく

なぜ辞めてしまったのだろうそう思う日が来るかしらやりかけの服

「いい人」のレッテルもらい自分から剝がす勇気もなく退職す

後悔はさらに無けれどふと惜しむ入試の子らのみずみずしさよ

やるべきとやりたいことが無秩序に並んだノート春の目論見

神妙を跳び越え友は「平日に遊べる人が増えて嬉しい」

家を出て30秒後白銀の飯豊の偉容胸キリリの朝

流行り歌いつも遅れて好きになる車にはMAN WITH A MISSION

テレビより耳慣れし曲聞こえくる70年代は私のなつメロ

心惹かれる90年代の歌息子がさかんに聴いた歌

残　生

小野澤繁雄

生活感は車よりあるやみるときにすむ人確か庭に自転車

位置取りはなんの関係交差点待つあいだにも位置取りをして

冬畑は何もなくして畑の人花の話がロウバイになる

バス停にきてしる読みの向台（むこうだい）生きてこのよの解のひとつか

米に名がついてより幾年月か「天のつぶ」これは福島のもの

隣地には孫がすむというみちに出て終戦間際の今日もその話

ちぎれんがごとくに風に風車鳥除けの鳥みることもなく

花木なき一月の庭草花の類いなれどもすいせんが隅

老年は犬にもありて残生はわずかなるかなやあわれさに似る

冬川は合流点に歩ききつ対岸は自転車学校生徒ら走る

〈那須通信54〉

ハルが来るまで

加藤文子

みどりをたたえていた通りを隔てた牧草地も、氷点下の朝が訪れる頃には褐色を帯びる。落葉した木立に囲まれた土色のひろがる牧草地を見ていると、しんみりした気持ちになる。この心もとない感情は、いつも冬を迎えた頃にどこからともなくやって来る。

以前は牧草地と後ろ隣りに面した別荘地のあいだには杉の防風林があった。どうした理由か、あるとき伐採が進み、あっという間に防風林は姿を消した。あたり前のように見てきた景色が一変した。

それまで見えなかった別荘地が現れて、木々のなくなった風景に物足りなさを覚えた。

赤く燃えた夕空が杉の木々をシルエットのように映す。まるで別世界に誘われていくような光景だ。

雪を纏った防風林、冬色に染まった常緑の葉にみどりが蘇る春の萌しも、牧草地と杉の木々は空

を背景にたくさんのシーンを見せてくれた。

日が落ちる頃、別荘の家々に明かりが点る。向こうからはこちらがどんなふうに見えるのだろう。

十二月のはじめ年内最後の催しが終わり、お礼状書きや山積していた用事も、ひと通り片付いた。

片付くと同時に、心に溜まった諸々が発散されていくようで気分が軽くなるのだった。もうこれ以上何もできないと思われていた心にスペースができて、やらなければが、やろうかナ、そのうちぜひやりたいに変化するのは不思議だ。いつの間にか、ヤルゾー気分が満ちている。

再来年度のカレンダーや展覧会のための鉢づくりをはじめる。

まずはパソコンに取り込んだたくさんの画像からカレンダーに使えそうなものを選び出す。春の空気、夏の空気、秋も、冬も、それぞれの空気を呼び寄せてイメージしてみる。イメージしながら力を抜いてボンヤリ見ているうちに候補が浮かび上がる。

選択のポイントは、ワクワクするか否かを大切にして各月ごとに当て嵌めてみることだ。何度も作業を繰り返しているとパズルが嵌まるようにカチッと決まる。

冬のあいだ夫が私のために期間限定で、アトリエの仕事机の一角を空けてくれているので、カレンダー制作と並行して鉢づくりも行っていく。

外仕事のできない雨や雪の日は、鉢づくりにもってこいだ。期間限定なのだからチャンスを逃すわけにはいかない。

コンクリートの床のアトリエは特別寒いので、ジャンパーやオーバーパンツを着込んでのぞむ。家の中なのになんて大袈裟なんだろうと我ながら可笑しくなる。

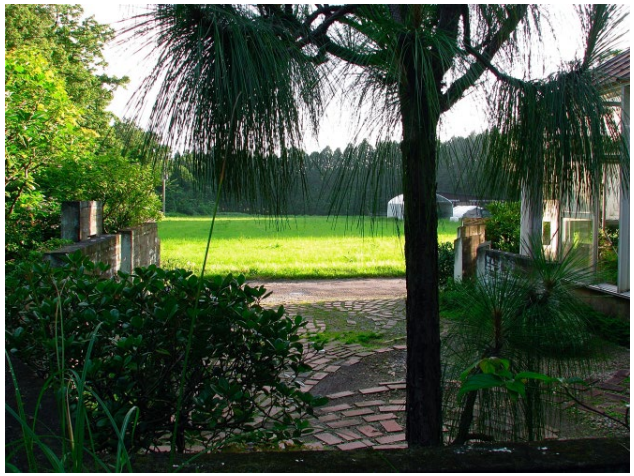
一年振りに粘土に触れる。覚束ない手先も、粘土をまるめているうちに要領を思い出す。

快適に根を伸ばし、灌水した水がスムーズに行き渡り、表面の土から陽のぬくもりも程良く内部まで伝わって、安心して生命を委ねてくれるような植物の住まいを……。

そんなことを願って、開口部や深さを考えながら鉢をつくってみる。

何はともあれ、私の気持ちはとても前向きなのだから……。

春が来るまでに冬の仕事をたくさんしたい。



防風林の並ぶ牧草地の風景

〈薫風颯々28〉

小説ユーミン

神村ふじを

「山手のドルフィンは　静かなレストラン…♬」学生時代に出逢ったこの曲に憧れて、何年も前わざわざ横浜まで出掛けて行ったことがあった。山手のドルフィンとあったので、山手駅から歩いて行ったらとても遠くて、根岸駅から行った方が近いことがあとから分かった。

曲に出てくるような眺めが目の前に広がり、ソーダ水を通して貨物船を見てみたい衝動に駆られたが、何だかあまりにミーハー過ぎて、静かにアイスコーヒーを飲んだことが今も悔やまれる。

店のマスターは客の風体を見ただけでユーミン目あてのお上りさんと分かるのだろう、気を利かせて「海を見ていた午後」を流してくれた。こういう客が日に何組か来るのだろうと思った。

最近、山内マリコ著『すべてのことはメッセージ 小説ユーミン』を読んだ。冒頭の部分に左沢が出てくる。八王子の大きな呉服屋の娘として生まれたユーミンは、左沢（あてらざわ）生まれ（と読み取れる）のお手伝いさんの秀子さんを母親のように慕い、久々に里帰りをした秀子さんと一時も離れるのが厭で、山形まで着いてきてしまったのだった。

結婚せずに家に残ることが悪であるかのように思われる時代にあって、秀子さんは二十代半ばになって、職を求めて上京する。その先が八王子にある「荒井呉服店」であった。

女性の名前は実名らしかったので、調べてみたら宮林秀子さんという人が実在していたことが分かった。また、左沢出身ではなくて、隣町西川町の月岡という集落の出身であることも分かった。というのも、私の友人の母親が秀子さんの隣家の出身であり、ユーミンの乳母代わりになった秀子さんのことをよく覚えていたのである。

聞くところによると、ユーミンは大人になってから逆に独身であった秀子さんを見守り続け、確かではないが、秀子さんはハワイで独身のまま生涯を閉じたということである。

「あのひとの　ママに会うために…♬」「魔女の宅急便」のＤＶＤから「ルージュの伝言」が流れてきた。時折、春の強風が吹くこの時期、魔女にとっては幸か不幸か……。

春一番魔女は箒に猫乗せて　　ふじを

＊山内マリコ『すべてのことはメッセージ 小説ユーミン』（マガジンハウス、２０２２年）

対詠　ごきげんいかが？　PART 85〈2023〉

ＯＮＯ　小野澤繁雄
布宮　慈子
（ＫＮＯ　河村　郁子）

花のある畑畑のある庭庭のなき家に育ちし子どもらおもう　2月8日　O

立春を過ぎしといへど雪の降る羽州は未だ春には遠し　2月15日　N

雨水その意味がクイズになっていた雪の残りの幾日間へて　2月20日　O

田の上を白鳥三羽飛び行けば春へ春へと近づく羽州　2月24日　N

白梅のある家紅梅のある家ともにある家咲いてしれるや　2月27日　O

啓蟄に梅の蕾の見えてきて春めく出羽の雪は消えゆく　3月6日　N

幟なる通学路またこども一一〇番の家いずれ春色　3月10日　O

梅咲いて梅見のころとなるはずの羽州まさかの週末の雪　3月18日　N

弓取式そのマネが上手かったのはだれ中学時代のだれかれおもう　3月21日　O

山形の桜未だし観てきたり同級生の油絵「桜花」　3月27日　N

これが咲くと咲いた感じがするよねと園の桜は育ちしさくら　3月29日　O

山形の真ん中の桜満開にて西公園は七分咲きなり　4月6日　N

その週は心うごかしソメイヨシノ今は大島、枝垂れをしみる　4月10日　O

いちだんと鳥の囀り高くなり枝垂れ桜は葉桜となる　4月17日　N

前号作品短評A〈小野澤〉

●菩提寺の庭はそれぞれ紅葉(もみぢ)どきさくらもみぢと区の保護樹林　河村郁子

深閑寺が菩提寺の名か。一連タイトルは「深閑寺庭　もみぢどき」。それぞれ、は桜（の部分）と区の保護樹林としているところ、ということか。いずれももみぢどきなのだ。そこに来ている。場所をあきらかにする始めの歌。区の、とあるので、寺のありかは東京都区内ということもしれる。

名木と指定されゐる公孫樹(こうそんじゅ)34メートルを樹下より見上ぐ

ルビをいちやうとした歌もあるが、この歌ではルビをこうそんじゅとしている。少し改まって距離が置かれた感じ。音数の関係もある。イチョウ科唯一の落葉高木。普段は下を向いて歩いているようなところか、こんな風に見上げることはある。頼みになるような高さ、また、（寄りかかってしまう）図太き幹（四首目）。

いろいろ気持ちや感触の交歓があることになる菩提寺の庭。なかにこの歌、下句独特。

散り敷くるいちやう落ち葉を踏みゆくに足裏(あなうら)に淡き触れ合ひ覚ゆ

●月山の白と懸巣(かけす)の白映えて　新野祐子

月山、懸巣いずれもパーツが白か。見重ねているところ。月山をみたことはないが、夏でも雪渓がのこっていることでしられる。ここでは秋の山のひとつ。遠景と近景でもある。映えて、の意味は目立って、引立って、際立って。

秋の日の生んだ彩雲より羽音

秋の日の、で提題し、彩雲より羽音で視覚から聴覚にもってくる運動感。それも遠くから。

清太岩山(せいたいわ)は天狗の名だろう天高し

より近くの（あるいは足下の）山か、清太岩山(せいたいわ)は。検索すると清太岩山（朝日連峰）と出てくるものがある。やや親しい呼び名（方）。天狗の名だろう、には説明がないが、清太がいかにも人の名であるところからか。調子のよさがある。

土を踏んでいる感覚も確か。山行のその刻々の空気感、そこに一連の魅力がある。

●ぽんぽんと上がる湯気なり中華粥その勢ひやよし寒き朝に　布宮慈子

一連タイトル「中華粥」。これで検索するとこれでもかというくらいにレシピを多くみる。一連では、おおよそレシピ通り、といっていい手順で歌がならぶ。みな手がうごいていて、歌に勢いがある。また引用の歌、三首目からも、朝食にしていることがしれる。

沸騰した湯に米から、粘りなき粥、土鍋、手羽元を水から煮出してスープにする、ニンニク胡麻油が入る、仕上がりが米の花、薬味にザーサイ、枸杞（くこ）の実。そして蓮根、は別途蓮根粥というそのヴァリエーションの一つか（十首目）。

作る楽しみ、は手間の楽しみでもある。最終歌は、名称としてならんだ粥。

家事の一部だが、食事は活動になっていて、それがここでは中華粥。いずれにも心弾みがある。

小豆粥、芋粥、蓮根粥、白粥さへもわんわんと炊く

前号作品短評B〈慈子〉

●コバトンが仲良くしているところなれならび歩いて川をきれいに　　小野澤繁雄

「コバトン」とは何かと思って調べてみると、埼玉県のマスコットだった。平成十六年（二〇〇四）に開催の第59回国民体育大会に向けたマスコットイメージを募集した結果、選ばれたもの。「シラコバト」と「バトン」で「コバトン」と命名したとのことである。歌の意味は、埼玉のマスコット・コバトンが仲良くしている場所なのだろう、並んで歩いて川をきれいに。語尾が省略されているのでわからないが、このような標語とイメージの看板があったとも解釈できる。いずれにしても、コバトンという地元のマスコット名を敢えて用いて、インパクトを与えている歌である。

人生の余白のようなみちにでてススキ伸ぶ秋なれば秋風

「人生の余白のようなみち」で、大方は表されているのではないか。「伸ぶ」は文語調であり、いったんここで切れるが、全体の音数を整えるために必要だったのだろう。

●晩秋の風に吹かれてほつほつとわくらば落ちる並木路をゆく　　市川茂子

秋の終わりの風に吹かれながら、枯れて変色した葉が少しずつ落ちてくる並木道を行く、という。おそらくは一人であり、心象風景ともいえるものだ。

夕暮れのあわき陽ざしにあきつ飛ぶ心静かな一日の終り

路地を来て曲がるこの角扉ごしにハゼの実赤く小春日に映ゆ

解釈するのに難しいところはない。「あきつ」はトンボのこと。一日の終わりに出合う風景は穏やかであり、作者自身の心の持ちようが反映していると見るべきであろう。あとの歌は、路地の曲がり角の扉から見えるハゼの実が赤く、暖かな秋の季節に映えている様子をいう。あきつが赤トンボとすれば、いずれも赤であるから、ほっと温かさを感じるのである。

●衣類の脱ぎ着洗顔整髪ままならず身は一夜にて棒のごとくに　　梅津純子

「棒のごとくに」と題する一連は、身体が棒のようになってしまったことを嘆き、その顛末を記す。

何といふわが身の重さ足立たねば掴まり立たむに手に力無し

肩痛み風呂をわかして夜の更けに温まむとせしことの幾たび

急激な体の変化に戸惑いながらも、なんとかしようと作者はもがく。

激痛に一睡もせぬ肩に打つステロイド注射麻薬のごと効く

種々の検査に該当無き故確定すリウマチ性多発筋痛症と

いろいろ検査をしたけれども、どれにも当てはまらないので、この病名に決まったのだという。ステロイドは強い薬と思うが、痛みを緩和するためには仕方がないのだろう。早く回復することを願うのみ。

●まず衣装次に発声・ハーモニー三年ぶりのステージが来る　　大橋千佳子

コロナ禍で開催できなかった期間があり、三年ぶりに催される行事とのことだ。衣装と発声等とあるから合唱なのだろう。一連の題は「制限も緩和されつつ」であるが、マスクはまだ付けたままだ。

Ｎコンの子らのマスクは皮膚の一部何事もなく上げては歌う

やめ時の踏ん切りつかず来客にかざす非接触体温計

「Ｎコン」は、ＮＨＫ全国学校音楽コンクールのこと。生徒たちは大人の心配をよそに、マスクが皮膚の一部のように扱っている。いよいよステージが始まる。いまや馴染みとなった接触せずに測れる体温計を来客に向けながら、いつまで測ればいいのかとの疑問をもつ。表舞台の生徒のさりげない表情と、大人の内心の揺れとが交錯する歌が多かった。

〈エッセイ教室「清紫会」の作品より〉

はじめての事

市川茂子

去年の年末年始はコロナ禍が広がっていたが、例年の通りに身内や近所の方も来て、にぎやかな新年の出発ができた。

年齢を一つ重ねるごとに寒さがことさら身にしみるようになったのも、九十歳になってはじめての経験である。老衰とともに、見えないところで未だにコロナの感染が続いていることもある。もしも感染したら回りの方々にも迷惑をかけてしまうからと思い、かつてない一大決心をして、新年は一人正月をすることにした。

年末が近づくと、息子や甥など身内の者が心配して、食べ物を送ってきたり、必要なものや手伝う仕事がないかと言ってくるので、早目にこちらから申し渡しとして、一人正月をすることにしたと伝えた。これもコロナ禍の最中であるからと自分に言い聞かせながら……。

一人分といっても、一通りの年末年始の準備はしなければならない。これまでは息子や甥が自分たちの仕事を片付けて、年末から来て自分たちの食べ物はもちろんのこと、こちらの必要なものを指示すると、スーパーや商店街に行って用意してくれた。

それを煮たり焼いたりして正月用の料理にして出すのが、こちらの役目だった。仕事始めの前日ぐらいまで泊まっているので、足りなくなったらすぐに出かけて買ってくる。昔ながらのわが家の味として煮炊きしたものを懐かしく食べてくれる。大晦日から酒盛りがはじまるのだった。

去年までは、楽しみながらの正月を忙しく過ごしてきたのに、九十歳の声を聞いた途端に動くのが面倒になってきた。ご近所で可愛がっていたお嬢さんが結婚して、ご主人と二人で正月の挨拶に来るという電話があったが、今年は皆さんを断って一人正月にしたからと、丁重にお断りした。

一人正月の年末年始の用意をしながら、静かな元旦を迎えた。何となく落ちつかないような気もしたが、日常の一人暮しの延長だと思っていると、二日目にはいつもお世話になっている方が、年賀の挨拶とごきげん伺いに来て下さったので吻(ほう)とした。なにしろはじめての事である。

それにもう一つのはじめての事があった。昨年の十月になって、この年齢になったので何かあれば唯事(ただごと)では済まないだろうと思い、近所の診療所ではじめて区の健康診断を受けた。後日の検査結果で心臓肥大など、いくつかの悪いところが見つかった。診療所では精密検査ができないので、いつも行っている病院に紹介状を書いてくれた。

一人正月の静かな年明けの一月五日から、病院の予約で行動がはじまった。

無二の会短信

◆年古りて、寒さとコロナ禍にこもっているうちに、今までのような交流が出来なくなった。言われなければ物事が進まない。その一つに原稿の〆切が近づいて来ると思いつつも、切羽詰まらないと心も体も動かない。慌てるとますますまともな歌が出来なくて、悩みながらそれでも何とかまとめなければと、自分を赦すことに心苦しく思いながら出してしまう。　市川茂子

◆十四年ぶりにやっと二番目の歌集の原稿が固まりつつある。この歳月は東日本大震災が起こり、東京電力の福島原発爆発という人災が重なった。沖縄では辺野古を容認した現職をやぶり、自民党の県連会長であった翁長雄志氏が新基地反対を掲げ圧勝した。翁長氏は、国への渾身の訴えを無視される沖縄の民の心を「魂の飢餓」と語ったが、日米の強大な圧力と闘い続け癌に斃れた。沖縄に、福島に、宮城に足を運んだ記録と雪国の四季の中にある日常のつぶやきの一冊を皆さんのもとにお送りしたい。数首でも心に留めて頂けることを願っている。　梅津純子

◆学校勤務を今春辞めることにしました。長年の、十代と共に過ごせる大切な大切な日々と、遂に決別。決まってからは、振り返るでもなく先を期待するでもなく、「ありがたい今」をフワッとした感じで過ごしています。生徒たちをネタに詠めなくなったとき、退職の実感がわくのでしょうか。　大橋千佳子

◆二月も末になって、朝の日差しが眩しく感じられるようになってきた。こういう日は早朝気温がぐっと下がって堅雪（かたゆき、雪が締まって堅くなること、またその上を歩くこと）になる。子どもの頃、堅雪をしながら学校に行くことが楽しみでもあった。今は許されない光景になってしまったが…。山形にももうすぐ春が来る。「木灰を撒きて出羽の春動く」　神村ふじを

◆日中一人で家にいる時間が長い。それで、ついかかってくる電話に出てしまう。リサイクル・ショップから、と生命保険の代理店からの電話が多い。そういうことにも時代があるかもしれない。後者は、保険の見直しをすすめるもの。ところで、ことし七十五歳になろうというところ、終活のつもりで、（年会費の負担がある）クレジット・カードの解約、（掛金が少額のままの）生命保険の解約、それに組合員であることが長くなっていた生協からの脱退、などをした。手続きは連絡するだけという簡単なものから、やや面倒なものまであったが、そのあとで、何かアイデンティティーが薄まったような気がしたのは、不思議なことだった。　小野澤繁雄

◆二月二十五、二十六日福島県二本松市で「第49回日本有機農業研究会全国大会」があり参加した。福島県は有機農業が盛んである。二本松市には大内信一さんという有機農業のパイオニアがいる。県知事だった佐藤栄佐久氏が一九九〇年代県の方針として有機農業を推進してきた。原子力災害の影響で有機農業に舵を切る農家、特に若者が増えている。二十五日には全国各地から約三百名が参集した。若い人が目立った。テーマは「原発事故から十二年―食とエネルギーを考える」で、研究者、農業者らの実践報告があった。農業と太陽光発電を組み合わせた複合農業経営の取り組みは注目に値する。六ヘクタールの農地に九五〇〇枚のソーラーパネルを設置し、その電力を地域電力会社に売っている。ソーラーの下では大豆、エゴマ、ブドウなどを栽培している。このソーラーシェアリングはドキュメンタリー映画「原発をとめた裁判長　そして原発をとめる農家たち」に登場し、観た人々にも希望をもたらしている。震災後の十二年間に福島の有機農家がつくってきたネットワークの大きさ、層の厚さに驚嘆する。私たち白鷹町の弱小有機農家にそんな底力があるとは、とても思えない。二十六日の現地見学会では、東日本大震災・原子力災害伝承館と震災遺構・浪江町立請戸小学校を訪問した。燃料高騰の今、世論調査では原発再稼働に賛成の声が高まっているという。賛成の人々にこそ見て原子力災害の恐ろしさを学んでもらいたい。

新野祐子

編集後記

◆全体の原稿が少なくページ数が減っている。が、年長者にもかかわらず書く意欲にあふれる市川茂子さんに刺激を受けている。原稿が二枚以上になるときは右上を糊付け。結社の決まりが身に付いているのだろう。締め切りに間に合いそうもないときは速達で来る。「速達でなくていいですよ」と伝えてからは普通便になったが、編集部として背筋が伸びる瞬間である。

今回、河村郁子さんの短歌はお休みです。

◆「谷地（やち）ひなまつり」でバザーをおこなった。「地域食堂クレヨンピット」のアピールと資金集めが目的だ。雪国ゆえ、河北町谷地のひなまつりは昔から月遅れである。ひな市も立つ伝統行事だが、コロナ禍で四年ぶりのひなまつりとなる。バザーの話があったのは三週間前。「肉そば研究会」が肉そばの店を開くにあたり、店先を貸してくれるという。準備期間が短く不安はあったが、秋に向けて試しでやってみることにした。乗り気になった約二名のうちの一人ということで自分が責任者になってしまった。

手作り品は何にするか。さいわい友人が送ってくれた生地がたくさんあるので、ポーチと腕カバー（ショート丈）を作れるだけ作ろう。ひとり家内工業のおもむきで、がんがん作った。自分ではなく誰かのためなら力が湧いてくる。不思議だ。ポーチ十八個、腕カバー十二セット、仲間に売るつもりのエプロン一着が完成。追い詰められたからこそできた芸当（祖母の十八番）だ。釣り銭も用意。ほかに仲間が茶器セットなどを提供してくれて、なんとか見通しが立った。

当日は暖かく、快晴。朝九時ごろから人が出てきた。預かり品の値段付けやポップはゆっくり書こうと思っていたのに、客の対応に忙しくままならず。急いで「地域食堂クレヨンピット・バザー」「地域食堂の資金になります！」と書いて、あとは口頭での説明。当日手伝いの人は呼び込みが上手で、地域食堂のチラシを配りながらよく売ってくれた。お釣り銭を募金箱に入れてくれるお客さんもいた。春の最初のお祭りとあって地元民に限らず、近隣の村山、東根（ひがしね）、寒河江あたりからの人も多く、また仙台から来たという人もいて盛況だった。当日持ち寄った物品もあり、バッグやキャラクターグッズ、ぬいぐるみ、電子キーボード等も並べたが、一日目であらかた売れてしまった。その様子を見かねて、そば研の人が「あした洋服を持ってくる」と協力してくれることに。天気が味方してくれて二日間の売上は思いの外あった。店頭でのやり取りがおもしろく、自分たちも楽しめたことがいちばんの収穫だったかもしれない。二日間のイベントは終わった。秋のバザーに向けて弾みがついたことは間違いない。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。
61号からのバックナンバーも読むことができます。

季刊 展景 109号
二〇二三年四月二十五日 発行
編集・発行人 布宮慈子
制作 スタジオ・マージン
無二の会「展景」発行所
山形市上町二―一―七―二〇二
info@muninokai.com

Copyright © 2023 MUNINOKAI. All rights reserved.